

フィリピン生徒海外研修で育む新しい時代の人材育成

千葉県立千葉工業高等学校
(定時制の課程)
教諭 草刈 廣直

1 はじめに

私は、平成 27 年度末の異動で、現在は千葉県立千葉工業高等学校に勤務している。本研究発表では、私が千葉県立市川工業高等学校に在任中の内、平成 24 年度から平成 27 年度までの期間に取り組んだフィリピン・セブ生徒海外研修について研究発表する。文章中にある「本校」とは、当時勤務していた千葉県立市川工業高等学校を指している。

2 社会の激しい変化と将来の展望

日本の少子高齢化の進展と人口の減少により、今後 50 年の内に人口は 3 割減少し、生産年齢人口は、半減するという予測が出され、日本社会は、激しい変化の時代を迎えようとしている。家庭では核家族化がより顕著に進み、お年寄りや乳幼児など世代間の交流や家庭の果たす役割・意義などを伝えることが難しい時代になっている。地域では、特に、東日本大震災による教訓として、自助・共助・公助という考えのもと、行政・企業・地域などが一体となって防災力の向上を図るとともに、安心して暮らせる新たな社会的支え合いの機会の構築が早急に求められている。雇用面では、少子高齢化の進展も相まって外国人労働者の受入や、これまでの雇用慣行が変容しつつある中、近い将来、小学校に入学した子どもたちの 65% は、大学を卒業する時に、現在は存在していない職業に就くだろうとの報告が米国で発表され注目されている。

3 フィリピン生徒海外研修と生きる力育む取組

(1) 海外研修の経緯

本校は、平成 15 年度から課題研究で日本大学理工学部海洋建築工学科非常勤講師の指導のもと、地元市川市平田町会内で「地域の木造住宅耐震診断」を開始した。平成 22 年には、市川市・平田町会との三者で防災協定を結び、これまでの木造住宅耐震診断に加え、地域の防災マップの作成など、地域の防災活動に取り組んでいる。

海外研修は、これまでの防災活動を海外に広げようと、同非常勤講師が、かねてより交流のあったセブ工科大学（フィリピン共和国セブ市）とともに、同市のバランガイ ルス地区での防災に関する共同研究を開始することとした。

平成 25 年 1 月にセブ工科大学と姉妹校連携協定を締結し、同年 7 月から創立 70 周年記念事業として初めて生徒をフィリピンに派遣した。また、3 年

目となる平成 27 年 7 月には、フィリピン大学セブ校とも姉妹校連携協定を締結した。3 年間の海外研修では、工業科の専門性を生かした交流活動を実施した。さらに、国内での取り組みとして Skype を活用した、日比間の遠隔授業や定期的な交流など、多くの成果を得ることができた。

(2) 生きる力を育む活動

生きる力とは、社会の激しい変化の時代を生き抜くために生徒に身につけさせたい資質・能力である。本校の生徒海外研修は、生きる力の育成に資する取り組みの一つとして実施している。

事前学習会では、フィリピンに関する理解、英会話及び交流行事に向けた準備などを行った。また、事前学習会での協働的な取り組みをとおして参加生徒相互の人間関係の形成を図った。

事後学習会では、ブレンライティングや Show and tell などの手法を用いグループ協議やポスター発表などを繰り返し、海外での体験活動の整理と定着を図った。また、学校内外での報告会や研究発表会等の参加、報告書の作成など、多くの企画に取り組んだ。

本校の生徒海外研修は、事前学習会から事後学習会までの一連の活動をとおして、経済産業省が提唱する「社会人基礎力」の能力要素「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」を生かし、生きる力を育む指導を行っている。

4 海外研修による生徒の変化（アンケート調査）

(1) アンケート調査の方法・生徒の概要

生徒海外研修の 1 年間の取り組みをとおして生徒にどのような変化があったかを見るために、出発前日と帰国後の 2 回、アンケートを実施した。

参加生徒は、課程（全日制・定時制）・学科・学年・性別が異なり、海外研修に参加するまでは、お互いの交流はほとんどなかった。

(2) アンケートの構成・回答法・評価法

事前・事後のアンケートの設問は、例えば事前アンケートの「海外研修に参加しようと思った理由」に対し、事後アンケートでは、「海外研修に参加して良かったと感じたこと」とし、両者の設問が対になるようにした（表 1 設問の構成）。

回答方法は、「1 あてはまらない」、「2 あまりあてはまらない」、「3 ややあてはまる」、「4 あてはまる」の 4 段階とした。

生徒の変化は、「図 1 評価法」によって、良い変

化が見られたのか、負の変化が見られたのかを確認した。

表1 設問の構成

設問	設問内容・要素
0	・海外研修に参加したきっかけ ・要素：主体性
1	・海外研修に 「参加しようと思った理由」 「参加して良かったと感じたこと」 ・要素：課題意識・コミュニケーション力
2	・事前学習会での学びに、 「興味・関心が持てたこと」 「海外研修で役に立った内容」 ・要素：学習面・事前準備（協働作業）
3	・各取り組み 「事前学習会の学びで、自分に変化があった」 「海外研修によって自分に変化があった」 ・要素：協働的態度・学びの総合化
4	・海外研修での活動や訪問先で 「期待・楽しみにしている」 「満足できる活動ができた」 ・要素：実行力

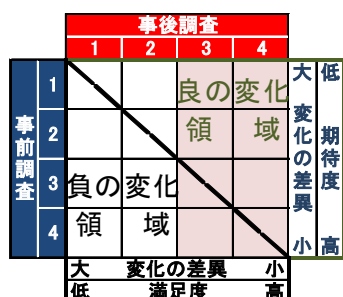


図1 評価法

(3) アンケートの分析

ア データの取扱い

アンケートを「生徒自身の意思で海外研修に参加した生徒」と「保護者等の働きかけで海外研修に参加した生徒」に分類し、各設問の回答にどのような違いがあるかを比較した。

イ データの分析

海外研修に自分の意思で参加した生徒と保護者等の働きかけで参加した生徒では、「取り組む態度」、「取り組んだ結果の感じ方・受け止め方」に差があった。両者は、全く同じ経験をしているが、はじめの意識の持ち方によって成果に与える影響が大きいことが分かった。

自分の意思で参加した生徒は、多くの面で良い経験となったと感じている。一方で、特徴的な面も見られた。学習面について、英会話や学校での授業などに対する意識は良い変化が見られたが、家庭での学習時間の変化は見られず、学校での学習の定着や深化の時間がとれていないことが分り、生徒の家庭

学習に対する意識に課題があることが分かった。

一点特筆すべきものとして、協働的行動・態度にかかる事柄について、「積極性や前向きな態度」について、良い影響があった生徒の中に「他人の意見を聞きながら上手に話し合いができるようになった」について、良い変化が見られない生徒もいた。生徒個人としては頑張ることができて、他人との調整力に課題がある生徒もいることが分かった。近年、体験活動・協働的取り組み等、他人とのかかわりを重視した取り組みや言語活動・アクティブラーニングなど、生徒の主体的な活動の重要性が取り上げられている。今回のアンケートの分析結果から本校の課題として、教育活動に生かしていきたい。

5 新しい価値を生み出す力

本校の取り組みの特徴は、日本・フィリピン両国の大学、企業、地域自治会等との連携による分厚い活動にある。また、学習会では、生徒相互の人間関係の形成と言語活動に特に力を入れ「生きる力」の育成に資する取り組みを行っている。生徒にとって海外という特別な場所での経験は、日本と外国の違いを理解し、その違いを受け入れながら、新たな見方や考え方を得ることができる場である。今回の交流の中で「日本のことを良く思っていなかったが、交流をきっかけに好きになった。」というフィリピンの学生もいた。生徒の取り組みは地道ではあるが確実に日比間の交流の裾野を広げている。

生徒はこの研修をとおして、自らの専門的な学びを生かし、どのように実践的に取り組むべきなのかという前向きな態度が芽生えるなど、知の総合化を図る効果がみられた。

工業高校は「ものづくり」というイメージが強いが、新しい時代の工業教育は、「より新しい価値を生み出す力」が求められる。研修では、技術・技能だけにこだわらず、多様な能力の伸長を図っている。そのため、生徒の専門的学びの探究心を向上させるとともに広い分野を横断的に学ぶ機会となっており、今後学力向上に役立ち成果が出るものと大いに期待できる。

私は、現在の工業高校が「ものづくり」にこだわり過ぎていて、知の総合化という視点での指導が十分に行き渡っていないと捉えている。海外研修で得られた、総合的な学びを工業教育にも取り入れ新しい時代に生きる人材として生徒を育てていきたいと思っている。